

TV 評『銀河宇宙オデッセイ』

ある日、わたしは、天文月報の編集に携わっている林正彦さんの車に同乗させてもらい、野辺山から東京へと移動しておりました。その車中の話題が、日本放送協会が放送したTV番組『銀河宇宙オデッセイ』のことになり、わたしは、感想・批判などを思うままに述べました。すると、林さんが「石附、いま言ったことを天文月報に書いてくれない？」とおっしゃるのです。わたしは、「全編を見たわけじゃないし……」とやんわりと断った（本音は来るべき原稿の締切の催促が苦痛だった）のですが、強引な林さんに押し切られて、結局、引き受けてしまったのでした。

さて、本論に入りましょう。宇宙についての関心を多くの人々に呼び起こしたという点からいえば、まことによい企画だったと言えると思います。たとえば、大学の食堂で昼食を摂っていたある天文学研究者が、まったく別の分野の研究者から「『銀河宇宙オデッセイ』見ましたよ」と声をかけられたという話を聞くにつけ、TV放送の影響力の強さを感じずにはられません。また、子供達はこの番組を見て、宇宙という存在に対して科学的な創像力をかき立てられたことでしょう。とくに、義務教育及び高等学校における天文学教育が非常に限られた範囲しか扱っていないために、専門家でない人々がヘリオスフェア、超新星爆発、宇宙の大構造、宇宙の進化といったことに関する情報に接する機会が少ないことを思えば、今回の番組で扱った内容は、視聴者にとって新鮮で、社会教育には十分貢献したといえると思います。

しかし、番組を見ている中で、いくつか気になる点がありました。以下、それについて一つ一つ書いていこうと思います。

まず一つは、宇宙船ヘリオスについてです。わたしは、この設定は、あまり効果的でなかったと思います。その理由は、まだ学問的に真偽のはっきりしない学説の一つでしかないのに、ヘリオス

が見たということで、視聴者にこれは事実であるという印象を与える場面があったからです。その顕著な例はダークマター（宇宙の暗黒物質）に関するお話です。（だいたいダークマターという言葉によって若くて美人の宇宙飛行士がノイローゼになって泣きだしてしまうと場面からして理解不能だったのですが、）ヘリオスが発見したダークマターが褐色矮星だったというのは、ひどく断定的すぎると思いました。そもそも、わざわざ宇宙の果てまでダークマター探しに行くというのが変で、これでは、地上実験で、ダークマターあるいはその反応生成物を検出しようとしている素粒子実験学者の立場がないでしょうし、ダークマターは銀河（団）間空間にしか存在しないものだという誤解を視聴者に与えたのではないかと思います。

二つ目は、視聴者に、天文学は宇宙の全てを明らかにしてしまったという誤解を与えたのではないかという点です。例えば、現在の宇宙論が観測事実とあわなくなってきたのに、そう言った記述はなく、あたかも完全な宇宙論が得られているかのような印象を与えていたのは遺憾でした。現在の宇宙論が完璧ではないという説明があれば、若い視聴者の中には、これに挑戦してやろうと思う人がもっと多く出てきたことでしょう。完全にわかったことだけを取り上げるというのは、教育する立場からすれば一つの選択肢なのかも知れませんが、わたしは、世の中には人類がまだ解決していない問題が数多くあるということを知らしめることのほうが本当の意味で教育的であると思います。

三つ目は、哲学の問題です。哲学的であるということは、「さまざまな現象(自然現象だけでなく社会現象も)を支配する原理について思索し、仮説を立て、観察・実験と比較して検証することによって、それを知ろうという態度をもつこと」であるとわたしは思うのですが、どうも世間に流布している文物を見ると、一般人にはわからぬ難しいことが哲学であり、それをありがたがること(神

秘主義!)が哲学的であるということのようです。『銀河宇宙オデッセイ』もこの“哲学”の呪縛からは逃れ切れてないように思います。ホーキング氏の扱いがまさにそうで、ホーキング氏について知りたいのならば、彼の生い立ちがどうこうということ詮索したり彼の“哲学”的な言葉をありがたがるのではなく、彼の科学的主張およびそれに至るまでの彼の科学的試行錯誤こそを重視して番組に取り上げるべきだと思います。10年ほど前に放送されたセーガンの『コスモス』は哲学的感動を与えましたが、それは、たとえばケプラーらの天文学者の姿を紹介することによって科学とは何であるかを伝えることに力を注いでいたからだと思います。今回の『銀河宇宙オデッセイ』を見て、絵はきれいだったし、内容も新鮮で刺激的でよかったのに、いま一つの感があったのは、この点で物足りなかったからであるように思います。

いろいろ批判めいたことを申しましたが、やはり、映像の力は強く、視聴者に宇宙を身近に感じさせたことの功績は計り知れぬ大きさがあると思います。何年かして同じような番組が作られるときには、天文学の進歩により、内容はがらっと変わっていることでしょう。銀河を研究するものとしては、題名が『銀河宇宙オデッセイ』である割には銀河そのものに関する記述が少ないなど、残念に思ったものですが、よく考えてみれば、銀河そのものについてはわからないことだらけで、TV番組にするには難しかったのかもしれない。番組を見ながらこう考えて、1990年代は、銀河についての研究を進める年代なのだなと、身の引き締まる思いがしました。

石附澄夫(東大理)

宇宙の起源

英国王立研究所公開講座「クリスマス・レクチャー」
最新のデータが語る宇宙の誕生

マルコム・S・ロンゲア 著
柳瀬尚紀 訳

河出書房新社、203ページ、1,800円

科学の最先端の成果を素人にわかり易く説明するという作業は、途方もない才能と努力を要求するものだ。特に、今もってわかっていない問題の、わからない由縁を素人に説明しようなどという暴挙に出る人は、まずいと言っただけでよい。著者のロンゲア教授は果敢にそれに挑戦し、これまでにない成功を治めている。

本書は、1990年度英国王立研究所「クリスマス・レクチャー」の内容を、講演者自身が本にまとめたものである。内容は、著者自身の言葉によれば、「宇宙に存在するありとあらゆるものの起源」を説明し、同時に「天文学者の現在の理解の最先端における知的興奮と、研究に対する途方もない要求」を伝えたものである。もちろん、「宇宙に存在するありとあらゆるものの起源」が現在分かっているわけではない。しかし、ここ二、三十年の間に、宇宙に対する理解は観測の面からも理論の面からも目ざましく進んでいる。その現在の到達点を科学者の大いなる努力にも関わらず解明されずに残されている問題点に重きを置いて解説したのが本書といえるだろう。

こういう未解決の問題の難しさの由縁を理解するには、その背景となる知識が必要なものである。実際、問題が問題であることが分かっただけで、その問題を学者がどう解こうとしているか、うまく解けたときにどういう知的興奮を覚えるかなど、自ずと理解されることが多い。本書でも、多くのページ数を費やしながらかし、しかし読者にあまり努力を強いないで、問題の背景が順を追って説明されている。むしろ、この辺の解説の周到さと緻密さが、本書を特徴付けていると言ってもいいかも知れない。また、最先端の成果を説明するに